
猫は何処から来た？

ごま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫は何処から来た？

【Nコード】

N4487BA

【作者名】

しま

【あらすじ】

猫が何処から来たのかを議論する話。

記憶は時間によって濾過され、より純化する。つらい思い出はよりつらく、凄惨に。楽しい思い出はより楽しく、明朗に。そして、不思議な思い出は、より不思議で難解なものになるのだ。

ぼくの記憶は大体、そんな感じだ。

また、当然だが、記憶は思い出せるものに限られる。思い出せるものは、おおかた、刺激的で、感情を揺さぶるような奴だ。たとえば、居間でテレビを見ていたら、台所から虎が出てきたとかそういう奴はあんまり忘れられない。もちろん、虎を飼っているとかそういう人なら、記憶に残ることはないが。大きく言えば、予測に反することが起きれば、人はその事象を脳に刻みやすい。

だが、ぼく、いや多くの人は他愛のないことを覚えていることもある。誰それが会議中に何回欠伸をしたとか、恋人が初めて目の前でおならした時の事とか、そういう感じのことだ。そうして、ぼくが今から書こうとしていることは、まさしくそんな感じの本当にくだらない事で、しかし、頭になぜだか鮮明かつ明晰に残っているという類いものだ。高校時代、部室で座って話したというレベルのものであつて、もっと他に覚えておくべきものがあるはずなのに、と後悔するぐらい低俗で普通の会話である。

その会話の主題は、猫は何処からきたのか、というものだった。もちろん発生学的専門話では断じてない。たかだか、世間話に次ぐちょっと日常にあつた不思議な話に過ぎないのだ。ぼくたちができるのはせいぜいそのぐらいの会話でもある。ぼくたち、と言つたが、そういうくだらない話するのは部員の間であることが多かった。その時の部員は自分を入れて三人。他の二人は共に女の子。一人は一つ上の小柄な先輩で、もう一人は同級であつた。この話をしたの

は先輩の方である。名は山田まやと言う。その先輩はまずこう言った。

「猫がいた!」

回想は、ここからはじめようと思う。

2 .

さて、部室に入室早々、そう叫ぶのはどういう人であろうか。出来る限り、接触を控えたい人種であっている。分かっているのなら避けるべきであるが、事情と言うのもある。彼女の両親と自分の両親が親交を深めているとかそういうのだと、幼い頃からの付き合いだから、とかなんとかで不可避な関係が出来上がるのだ。この部室にぼくがいるのもそういうしがらみ関わっている。しかし、向かいに座っている彼女はどんなのだろう。全く、我らの先輩が行なう珍妙な行為に対して何も反応を示さない。本を読み続けていた。言葉が少ない猿人には興味を持たないのだろうか。先輩は我々の無反応を気に掛けず、戸を閉め、我々のところに来る。ぼくの目の前に立つ。座っているぼくよりも少し大きいくらいの先輩はもう一度言う。

「猫がいたんよ」どうして、こつも言葉が少ないのだろうか。二文字増えても情報の質は変化していない。ということは、聞いて欲しいのだなと思いついた。

「どうしたんよ?」と真似てみたら、脛を蹴られる。あの痛みは今でもまざまざと思い出せる。身体をまげて脛を撫でていると、先輩が語った。

「調子に乗るなや」乗っちゃいないが。そう思いながら、やり直した。

「どうしたのですか?」

「うん、あのねっ」途轍もなく可愛らしい声で先輩はそう言うのだ。やってらんないな、と確実にそのとき思っただろう。

「あつと、その前になちちゃんも聞いてくれる？」先輩は後ろを向き聞く。中田かな。彼女の名前である。中田は、

「面白い話なら」とぼそりと言った。こいつのこういう態度には、前例、すなわちぼくの先の行為に対する先輩の対応を鑑みれば、体罰は行なわれてしかるべきであるが当然の如く行なわれない。現在に至るまで、中田は先輩の弱みでも握っているのかとか愚考してきただか、ぼくの知る限りそういうことはなかった。先輩は同性には優しいらしいということを経験的に知るのみだ。また、ついでに記すと中田は誰に対してもそういう態度で臨む。不遜とかそんな感じの単語がお似合いだが、きつとこいつは可哀想な奴で人に対して極度に怯えているがゆえに、強気な態度を取るのだろう。そう思いたい。そっちの方がぐつとくる。だが、共に過ごす時間が長くなれば長くなるほど反証が増える。今のところ、ぼくがこいつにそういう深層心理があると信仰するためには、永久機関を創るような気概が必要だ。ロマンがあるだろう？虚しくなるけどさ。

ちよつと話が逸れた。中田のことになるとどうも話したくなるのだ。面白い奴だから。それに、美人であるし。知り合いであると言うことがなんとなく誇らしく思えるほどだ。しかも、ああいう性格がわざわざいして男友達とかそういうのは一切いなかったようだ。高校時代、こいつが最もよく話した男性の一人としてぼくが上がるはずだ。そうだからといって、我々が恋仲であるとか思ってはいけない。こいつにとつてぼくという存在は視界によく入る男でしかない。加えて中田の美的感覚によると、我が容姿は下の上に位置するらしい。つまり、微妙に平均以下。嫌な感じである。ついでに言うと、先輩の美的感覚によれば中の下であるらしい。思うに一段階上がったいるのは、幼馴染効果によるものであろう。

また逸れた。もとに戻そう。状況はこうだ。先輩は中田の返事に、おもしろいよ、と答えつつ、その辺から椅子を持ってきて、話しやすいように我々を横並びにし、その対面に座った。我々が中学生を面接するような感じだった。先輩の見てくれは小さく可愛らしいの

だ。遠くから見ているれば小動物じみた行動の仕方もあいまって、癒し系の存在ともいえる。されど、ぼくはゴキブリが絶滅しない限り癒し系だとかそんなことを口にはしない。思いもしない。それは、たとえばだな、人がアザラシを可愛いと言うのに似ている。魚にとってはただの捕食者だ。ぼくは魚の位置にある。それなのに可愛いとか思えるものか。思えたら相当な達人であろう。もちろん、マゾヒストの道に通じる達人だ。残念ながらぼくは苦痛と快感は繋がってはいないし、無意識的の罪悪感も抱えてもいない。ノーマルで平均的な性質を持つ人間であると思う。実際のところ、どうなのかは知らないし、知りえないが。

横暴たる先輩の話が始まる。外的従順さをもつ我々は静聴する。

「昨日、部活が終わって、君たちと一緒に学校を出て、家に帰ったときのことなの。玄関は鍵が閉まっっていて、あとから調べたら裏口も窓も全部閉まっていたの。うち、一軒屋だから戸締りには細心の注意をはらうことにしているから当然のことなんだけど。それでね、家に入ると二階から物音が聞こえて、てっきり両親かなと思ったんだけど、靴がないんだよね。ということは母まだ職場にいて、主夫で二トな父は買い物にでも行って家には誰もいないはず。それに気がついたら、鳥肌が立つちゃったよ。空き巣しか頭に上らなかつたね。でも、軋み方とかそういうのが人のやつじゃないの。うちの家ぼろいからさ、二階の音なんて筒抜け。こっそりしても、絶対に分かつちゃう。そうなると、ネズミかもって思い立ったわけなのよ。震える足をなんとかして、そりそりと二階に向ったわけね。そしたら音はなんと、私の部屋からしてたの。漏れちゃいそうなくらい、驚いたね。しかも、戸を叩いてるのよ。どん、どんって。やばいな、怖いなとか思いながら、戸の前に行ったの。息を殺して、閉じている戸を手前に開いたら……」

「猫がいた、と」ぼくが答える。中田は語らない。

「そういうこと」と先輩はぼくに微笑みかける。隣の中田を見る。なんだかぼんやりしている。こいつが、ぼんやりとしているときは

大抵思慮に耽つてるときだ。ということ、この先輩の話は中田にとつても不思議な話だったのだろう。

「密室ですね」ぼくが言う。中田は口を開かない。聞いた話だとそう思えた。

「うん！」先輩は本当に嬉しそうに肯いた。こういった話が大好きなのだ。しかも、実体験となるとさぞかし歓喜しただろう。そして、こういう不可思議なことが好きだから、この部に先輩はいるのだ。そう、もう分かると思うがこの部室は、我ら通称ミス研のために宛がわれているのだ。

3 .

ミステリー研究部。ただただ奇怪なゴシップを愛する人々の集い場。もしくは、推理小説の世界に頭を毒されてしまった人々の安置所。彼女たち、つまり先輩と中田はマニアな人々なのだ。性格的な難点はそこから湧き出ている気がしなくもない。彼女たちのミステリー小説といった類いの物に対する愛と知識はかなり高水準であると思われる。素人であるぼくでさえもひしひしと切実に伝わってくるぐらいからだ。彼女たちが激論を交わすの眺めているときに最もそれを感じる。普段は情動に欠けている様な中田でさえ白き頬を赤く染めて、議論していたのだ。それを見ているとぼくは彼女たちとは別な方向で昂奮する。中田が火照ったり、先輩が苦悶の表情を浮かべたりしているのを見ていると結構、ぞくぞくした。ギャップがもたらす作用という奴だろう。ぼくは、その点でミステリーを賞賛している。それ以外にはあんまり興味を持ってない。事件とか犯罪とかそういうのもでなくとも不思議なことは多くあるのだ。当時もぼくの主眼は自然的なものに向けられていた。そっちの方が複雑で難解で、不気味だ。誰が創ったのかは知らないが、よく出来ているように思えた。それを少しでも理解するためにさえ知識と思考が無限に必要なだとも思える。しかも、そうやって理解したと思ったこ

とが、反証される余地があるという点でのみ支持されるところがなんととも言えない楽しさを生み出す。己の自然に対する極限の了解が後世にはただの塵芥に過ぎぬ虚偽あるいは誤解と成り得るのだ。かなり滑稽で、酷な話だ。これほど遣る瀬無いミステリーが在るものか。ぼくは無いと思う。しかし、そんな門外漢がどうしてこの部活にいいのかと言うと、ただの数合わせである。最近の本離れがあいまって、こういう地味な文化部には人は集まり難く、彼女たちにとって困ったことに休部の憂き目にあいそうになったのだ。そこで、先輩は思い出したように暇人であるぼくを入部させた。知らぬ他人よりも、知る奴隷の方がよかつたのだらう。入部以来、お茶汲み等の雑用はすべてぼく任せとなっていた。

さて、先輩は、特に密室ものが好きだ。中田は、何でも好きな雑食系だ。ぼくは、草食系で人が死なないものかつ、短く、オチの切れがよいものが好きだ。というか、読まされた中ではそういったものに面白味を感じた、というだけである。このときは密室。先輩の大好物。部屋に突如現れた猫。こいつは何処からきたのだろうか。それが問題だった。

「ねえ、どうしてだと思う？」首を傾げつつ、先輩は聞いてくる。その仕草は確かに可愛いと思われてもおかしくはない。思いたくないが。

「さあ」気の無い返事をするのはぼくのみ。中田はまだぼんやりとしている。横目で見ると、その様子はやっぱり可愛らしい。ほわほわしているというか、なんとというか。危機感の無さが何とも言えぬほど愛しいのだ。応援したい気持ちにもなる。ほんわかしていると先輩は椅子ごと我々の方に擦り寄ってきて、楽しそうに言った。

「昨日からずっと考えているけど、全然分かんないの！三人寄れば文殊の知恵でしょ？黒猫が何処からきたか、考えようよ！」

「黒猫だったんですか？」と聞く。初耳だと思ったからだ。

「ええ、黒猫よ。綺麗な毛並みで、瞳も耳も、とっても可愛らしいの。雰囲気もかなちゃんみたいに賢そうだし、実際とても行儀がい

いわ。しかも、身なりも綺麗だし、蚤は一匹もついてなかったし、人懐っこいし、鳴き声がきゅーとだし、もう、飼うことにしたわ！」次第に興奮しながら、満面に笑みを湛えて、先輩は言った。確かに彼女は猫を飼いたがっていた。しかし、

「よくそんな、わけのわからん猫を飼う気になりますね」

「わけのわかる猫よ。分別はしっかりしているわ。あんたより、マナーがいいし」

「違いますよ。生まれも経歴も分からないようなという意味です」

「そうね。確かにミステリーなクロちゃんだわ。しかし、だからこそ家で飼う価値があるのじゃない。なんて言っちゃって、わたしはこの部の部長だからね」

「そうっすか」怪しさは負の要素でなく、正の要素であるのか。呼び名も決定しているし、相当に気に入ったのだらう。それはそれで、良いことだった。

「で、なんか思いついた？」先輩は黒目勝ちの瞳で我々を見て聞く。中田が珍しくも口を開いた。

「ご両親は、飼うことに反対していませんか？」妙なことを聞く奴だ。

「うん。なんか、可愛いからいって」適当な人々である。彼ら、山田夫妻はなかなか楽天的思考の持ち主なのだ。だから、こういう娘となる。

「そうですか」と中田はぼんやりと行って、また存在を虚ろとする。ひと時沈黙が降りる。唐突に先輩がぼくの袖をくいくい引つ張りながら言う。

「ねえねえ、昨日ね、わたしの誕生日だったの。だからクロちゃんは天からの贈り物だったんじゃないかって思うんだあ」

「知ってますよ。猫を飼いたがっていたことも。しかしね、だからって、無茶苦茶不審なものを家に置くべきじゃないでしょう。もしかしたら、ストーカーさんの贈り物なのかもしれないよ」

「うーん」と先輩は唸る。彼女にストーカーさんが一人か二人着い

ていてもおかしくはない。

「でもね、」と先輩は言う。「玄関は閉まっていたし、合鍵で開けたとしても、私と会わなくちゃ難しいのよ。さっき言わなかったけど、私が帰ってくる直前にお父さんが家を出たらしいのよ。せいぜい家に誰も居なかったのは五分ぐらい。ストーカーさんなら五分じや用なんて済むはずないでしょ。パンツとか漁るんだから」

「まあ、そうかもしれないね」そのようにぼくが言うと、先輩は後ろへ大げさに身体を反らして、言った。

「えっ、パンツ漁るのは否定しないの。もしかして、君、やったことあるの？いや、あるにきまつてんよ」

「いやあ、ひどいつすね。そこまで、女の子に幻想抱いてないつすよ。ご存知の通り姉も居ますし。それに、先輩のパンツなんてスーパーの衣料品売り場に置いてあるようなものじゃないですか。先月買っていましたよね。見かけましたよ。十七才という年頃の女の子がクマさんの……」そこで脛にもう一度激痛が走った。脳天まで突き上がるような苦痛が息を止めさせたのを覚えている。潤む視界で先輩を見る。

「ごめんなさいは？」えらい剣幕で、先輩は言った。

「……ごめんなさい」痛みで震えた声で、ぼくは言った。

「じゃあ、誰か外部の者がその猫ちゃんを入れたのは不可能に近いのですね」と中田は独りごつる。猫ちゃんって、お前、と脛をさすりながら思ったのも覚えてる。

「そういうこと。さすが、かなちゃん！」

「それでは、内部の人。ご家族の誰かが猫ちゃんを匿っていたのでは？」

「母か、父ね。でも、聞いたところによると見知らぬ猫さんらしいわ」

「なるほど。ご両親が用意した猫ちゃんならば、その意図をしつかりと伝えるはずですからね。しかし、山田先輩に用意していたのではない場合なら」

「嘘をついていてもおかしくないってことか」感心しつつ口をはさむ。じろつと、中田に睨まれる。だが、そういう話はいいが、密室の意味を考えた方がいいだろう。

「だがな、中田。それもそれでおかしいが、もっとおかしいことがあるだろうよ」

「なに？」じつとりとした眼でぼくを見て、中田は聞いてくれる。

「先輩は、自分の部屋の戸を開けたんだ。わかるか？つまりな、戸は閉まっていた」

「だから？」

「猫は戸に体当たりをしていた。開けたがっていたんだ。自分で閉めたわけじゃない。誰かによって部屋に入れられて、閉じ込められたんだ」中田は眉を少しひそめた。

「それぐらい考えてる。だからって山田先輩のご両親が嘘ついていないって確信できないでしょう？」

「いいや、できる。嘘をつくのは隠したいからだろう。自分が猫を匿っていたということ。では、なぜ、隠したいものをわざわざ先輩の部屋に押し込めておく必要があるんだ？」

「それは、そうするしかなかったから。そういう状況なんて多々あるわ。自分のところにおいておくと他の人に露見してしまう可能性があった場合とかそうじゃない？」

「そうだろうよ。だけどな、花子さんと太郎さん、ああ先輩の両親の名前な、そのうちのどちらかがそういう意図をして先輩の部屋に猫をぶち込んだでしょう。花子さんなら、太郎さんと先輩にはれないために、太郎さんなら、花子さんと先輩にはれないために」

「待って、それだけじゃないわ。客人が来て、とかもありうるでしょう？」今度はぼくが眉をひそめた。先輩はにこにこしながら、我々の会話を聞いている。先輩もまた、中田が多弁となる姿が好きなのだろう。ぼくは、ひとつ息をついてから話をまた始める。

「それでもいいだろう。ばれないようにする人候補に、客人を入れてやってもいい。きっと猫アレルギーだとかなんかつたのだろう

よ。しかしだな、花子さんは仕事に行っているんだ。客人を呼べない。先輩、花子さんはいつものように、朝から晩まで職場にいたのでしょうか?」

「うん! 私より早く家を出て、私より遅くに家へ帰ってきたよ」

「そういうことだ、中田。これで花子さんが客人を連れ込むことはない」

「分かった。だけど、少し待って。あたしの知らない仮定とか条件がまだあるんじゃない?」

「たしかに、お前、先輩の家に行ったことないもんな」

「じゃあ、説明しよう! 詳細に、微にいるまで、我が家についての事を!」先輩は明るく言った。

先輩の説明はこうだ。家族構成は三人。父が主夫。母は第一部長企業の上社員。太郎は綺麗好きで、よく家の部屋の掃除をしている。そして、昨日もしていたらしい。家は一軒屋で、屋根裏部屋もついている。ぼくから見れば、なかなか大きい家である。部屋数も多い。余り使わない部屋、物置部屋となっている所さえある。よく、姉とぼくと先輩でかくれんぼをしたものだ。そして密室現場である先輩の部屋については、一つ窓があつて、二階であるためそこは鍵をかける事をしばし忘れることが多い。その窓の大きさは子供が侵入できる程度であるが、大人となると不可能に近い。ぼくは、幼いころたびたび先輩がそこから部屋に入るのを見た。器用に登れば、その窓までたどり着ける。排水管のパイプなどにつかまり、サルの如く登れる自信があればの話だが。

「まあ、こんな感じね」すべてを言つて、先輩はそう呟いた。実のところ、様々な寄り道をしていたがゆえに上の内容よりも話したことは多いのだが、関係性は低いので割愛した。

すべてを聞いた中田はまたぼんやりし始めた。こいつは真相を見抜けるだろうか。猫がどうして、先輩の部屋に閉じ込められたのか。仮定を疑えば万事解決する。

中田が重い口を開く。

「やっぱり、よく考えたけど山田先輩のご両親が嘘ついていることなんてなさそうね」

「だろう?」

「え〜。どうしてよ、かなちゃん?」

「まず、山田先輩の部屋に入れておく利点がないのです。部屋が多数あるのなら、よく使わない部屋に入れておくだけでいいはずですよ?また花子さんが隠すにしても、太郎さんにはばれてしまいます。太郎さんは家をほぼ毎日隈なく掃除していらつしやるようですし。もちろん二人とも嘘をついている場合なら、良いのですが。しかし、それでも、なぜわざわざ山田先輩の部屋に置いとくのか。しかも、山田先輩が帰ってくるのとわかる時間に。忘れていたのでしょうか、いいえ有りえません。その程度の隠し事ならば、嘘をつく必要はないと、あたしは思います。しかし、これは主観的な判断です。太郎さんと花子さんには、この論理は通用しないかもしれません。けれども、結論として、山田先輩一家は猫を飼うことになっているのです。」

猫を隠して飼うのは、家族で反対する人がいるから。そうではないでしょうか。もちろん隠し事のスリルが欲しいからだとかでもかまいませんが、その場合であると山田先輩の部屋に置いたことが奇妙に思えます。こうやって、突き詰めていけば、山田先輩のご両親が嘘をつく必要性は低いと思われるからです「ここまで長々と中田が語ったのは久しぶりである。しかし、淡々と語るのどぼくが興奮することはなかった。先輩は斜め上を見つめて唸った。それから、

「今、思いついたんだけどね、お父さんが匿っていた場合で、しかもクロちゃんを通い猫だったらどうかしら。お父さんは家に来る猫に餌あげるだけだし、家においておく必要はない。それなら、どうしてわたしの部屋にいたのかって言うと、餌あげたあと、お父さん

が玄関の戸を閉め忘れたとかそんなのでたまたま入ってきつちゃったわけ。きつとわたしは部屋の戸を開けっ放しにしていたから、入って来れたんじゃないかな」

「でも、それだと先輩の部屋の戸が閉まっていた理由を説明できませんよ」ぼくはちゃちゃをいれる。

「できるよ。お父さんが閉めたとすればいいの。クロちゃんは寝て、音も立てていなくて、ベッドの下に潜り込んでいれば分かりやしないわ。それで、お父さんがたまたま二階に来て、まあ、自分の部屋に用があつたんでしよう、それでわたしの部屋の戸が開いているのに気がついて、閉める。そうすれば、密室が誕生するわ！それと、わたしたちに嘘をついたのは通い猫のためにお金を使っていた事をばれたくなかつたとかよ」ぼくは中田を見た。中田はさらにぼんやりとしていた。相当に集中しているようだった。そうして、その淡き、端正な唇を開いた。涼やかな声が響く。

「大体、山田先輩が言うような感じでしよう。しかし、太郎さんは自分が猫ちゃんを招き入れたことには気づいていなかったと思います。つまり、猫ちゃんは通い猫ではなかつたのです」

「どうして？」ぼくと先輩は同時に言った。中田は少し微笑んだ。貴重な笑みである。

「通い猫には帰る場所があります。山田先輩、今日の朝も猫ちゃん、先輩の家に居たでしょう？」

「ええ、すっかり我が家に馴染んでいたわ。ああ、そうね。通い猫なら、長居はしないよね。じゃあ、一体なんだつたの？」

「迷い猫。もしくは、捨て猫の類いでしょう。きつと、山田先輩の家が以前居た家に似ていたのです。それで、猫ちゃんは家の周りをつろつろしていました。で、きつと太郎さんが掃除をしている時入り込んだんです。掃除をするとき換気のために、窓を開けるでしょう。そういつた、隙間から侵入したのです。では、太郎さんは何故気がつかなかつたか。掃除をしていれば家中に音が響きます。猫の足音ぐらい、掻き消されるでしょう。それで猫ちゃんは二階に行き、

山田先輩の部屋に入り、安心してベットの下の入り眠りについた。あとは、山田先輩の言う通りなのではないでしょうか？」先輩は、大きく眼をあけて、驚いていた。それから、次第に頬を緩めていき、にっこりと笑った。

「なあゝるほど！」

そうして、先輩には猫が何処からきたのかが分かった。全く、中田はおもしろい奴だ。

5 .

先輩は、もう家に帰った。猫と遊ぶらしい。余ほどに気に入ったのだ。それから、まだ我々は帰っていなかった。互いに向かい合いながら、本を読んでいた。下校時間まで、あと少しというところになって、中田が俯いたまま突然に口を開いた。

「黒瀬君。よかったね、山田先輩が気に入ってくれて」黒瀬とはぼくのこと。そして、こいつが名字でぼくを呼ぶ時大概、嫌なことが始まるのだ。ぼくは惚けると決めた。

「なにをだ？」

「黒瀬君の、山田先輩への誕生日プレゼント」中田は顔を上げ、ぼくの瞳を見つめた。その瞳は美しかった。ぼくはこいつのこういうところが大好きなのだった。純真に、じっと人の瞳を見つめるところが。

「あげた覚えはないんだが」

「うそ。あげた。あたし、知ってるよ」中田は笑って言ってくれた。微笑とかでなく、正真正銘の笑顔だった。見惚れつつも、ぼくはまだまだ惚けた。

「だから、なにをさ？」

「猫ちゃん」ぼくの鼓動が早くなったのを覚えている。

「最初から、説明しようか？」中田はやさしく微笑みかけてくる。

こいつは、ぼくを追いつめたいのだな。そう分かった。受けて立と

う。

「そうだな。そうしてくれ」ぼくの言葉を聞いた中田は、ますます嬉しそうに頬を緩めた。中田は手に持っていた本を床に置いてある鞆に仕舞って、ぼくの方へ椅子ごと擦り寄ってきた。我々の間はかなり近い距離となる。じーっとぼくを見つめてから、再びその唇を開いた。

「まず、おかしいなって思ったのは、山田先輩が、猫がいたって言ったとき」

「そこから？ どうして？」

「だって、黒瀬君、どうしたのかって聞いたでしょう。普通なら、どこで聞かなくちゃならないのに。まるで、どこにいたかが分かっている、その猫ちゃんがどうしたのかって聞いている感じだったよ」

「そんな風に思われてしまうとは……」

「次はね、山田先輩が猫ちゃんを飼うって言ったとき。あたしはね、不思議だったの。だって、黒瀬君が言う通り変質者の贈り物であるかも知れないのに、それを置いとくなんて。しかも、ご両親も許している。普通だったら、ありえないよね。いくら、山田先輩のご両親だって愛娘のことにはもっと神経質になるはずだわ。ということ、はね、ご両親は猫ちゃんが来ることは知っていたんじゃないかって思ったの」

「だから、二人が嘘をついているって言ったのか」

「うん。でも、黒瀬君に有耶無耶にされて、違うかなって思っちゃった。惜しかったね。けど、それのおかげでもっとおかしなことに気がつけた。黒瀬君がしきりに密室だと強調していたこと。ぜんぜん密室じゃないのにそう思わされた。だって、山田先輩の部屋には鍵をかけていない窓があるっていうのに。山田先輩の家の話を聞いている時に気がつけたわ。それから、あたし、もの凄く考えた。分かったでしょ、集中してたの。今日はしょっちゅう、あたしのこと見ていたもんね。それで、分かっちゃった。昨日が、山田先輩の誕生日だとわかっている人。山田先輩が黒猫を飼いたがっていたこと

を知っている人。山田先輩がいつも部屋の窓を開けていることを知っている人。しかも、山田先輩のご両親と親交がある人。それって、幼馴染である君しかないよね。

黒瀬口ク君。君こそが、山田先輩の部屋に猫ちゃんを入れた張本人だ」にこにこ中田は言った。

「あの話は、どうなったんだ？掃除中に猫が入ったとかの」

「あれはうそ。だって外から猫が入ってきたら、足跡が着くじゃない。掃除中なら家中を歩き回っているのだから足音なんて気がつけないけど、足跡には気がつけるわ。綺麗なところが汚れていればひどく目立つし、まだ、掃除していないところを歩いたら尚更気がつけるでしょう。だって掃除する時は普段より眼を凝らすもの」

「…確かに、そうだな。どうして、そんな嘘ついたんだ？」

「密室も誕生日プレゼントだったんでしょう？だから、本当のことは山田先輩に気づいてもらえるようにしたかったの」

「へえ。お気遣いありがとうよ。だけどね、中田かなさん、君は間違っているぜ」

「えっ？」中田が驚くなんてところは、このときに始めて見た。それは、なかなか心にせまる表情であった。今でも、まざまざと思いつける。ぼくは、じつとその表情を観察してやった。そうしていたら、最終下校時刻を告げる音楽が鳴り響き始めた。

6 .

「どういうこと？」中田は掠れた声で聞いてきた。

「まあ、まやさんはアホだが、中田は仕方ないな。さっき言った条件を満たすのは正確にはぼくだけじゃない」中田は、眉をひそめる。眉間にかなり皺がよった。幾分かして、中田は、眼を見開いた。

「君の、お姉さん？」

「そういうこと」中田と我が姉、黒瀬ナナとは接点はない。気が回らなくても仕方ないだろう。それに、まだある。

「昨日の事を良く思い出せよ。放課後、ぼくたちはどうした？」

「えっ……。ああ……。一緒に帰ったね……」

「そういうことでもある。我が家とまやさんの家はなかなか近いって知ってるだろ。一緒に帰って、その後猫を持って、先回りするのは不可能だ。つまり、この部活風に言えば、ぼくにはアリバイがある。証人は、中田自身だぜ」中田はぼんやりしていた。その表情はやっぱり、どうしようもないほど可愛かった。いじめたくなるくらいに。ぼくの顔面はイヤラシイ感じに緩んでいただろう。

「さて、真相をお話しようか」中田は反応せず。ぼくはにやにやしながら語り始めた。

「中田の言う通り、ぼくは最初から分かっていた。姉が馬鹿な事をかましていたって事をだ。姉はな、まず正當に玄関から入って手渡ししようとしたんだ。しかし、誰もいなかった。丁度、太郎さんが買い物に出掛けた後だったんだ。姉は変な奴で、知らないと思うが三年前にはこの部の部長だったんだ。まやさんがあなのは、姉のせいだと言えるね。思考が似通ってたんだ。で、不思議な事もついでにプレゼントしようとした。五分の間に、排水管のパイプをよじ登り、窓をあけ、猫をまやさんの部屋に放り込んだ。それで窓を閉める。密室のようなものの出来上がりだ。まやさんが帰ってきて、家に入るのを見計らって、敷地を出た。そのあと、スーパーから買い物帰りの太郎さんを捕まえ、事情を説明し、口を割らせないようにする。花子さんのほうにはメールを送ったんだろうよ。まったく、馬鹿な野郎だ。で、ぼくはそれに便乗して、もっと有耶無耶にして、中田も巻き込んだわけさ」

「……。どうして、山田先輩は気がつかなかったの？」

「……。やっぱり、あの人はアホなんだよ」

それから、我々は共に部室を掃除し、共に昇降口を出て、分かれ道まで共に歩んだ。その間、終始中田は無言であった。いじめすぎたかなと少し後悔したが、明日には元気に読書しているだろうと思うことにした。

「じゃあな」別れる時そう言ったが、中田は何もいわずさっさと行ってしまった。ぼくもなんとなく傷ついたのを覚えている。

7 .

以上が、回想である。所々、食い違つところがあるかも知れないが、大筋こんな感じだった。クロはいまでも元気にやっていることを付け加えておく。

また、なにか思い出すことがあれば、整理しこのように書いておこう。そうするとなかなか楽しいからだ。そう思いながら、ぼくは筆を置く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487ba/>

猫は何処から来た？

2012年1月12日01時58分発行